

時代を超え、国境を越える世界基準のモノと人。

独立創刊特大号 [クラッチマガジン]

クラッチマガジン 2014年6月号 (毎月24日発売) 4月24日発売 第1巻 第1号 通巻1号

CLUTCH

Magazine

Authentic, Borderless &
Creative Production
2014 Vol.27

6

第2特集

Indigo Works
in Spring

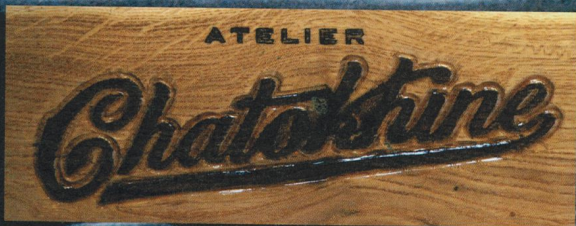
“クールガイの条件は
カジュアルリッチ”
特集



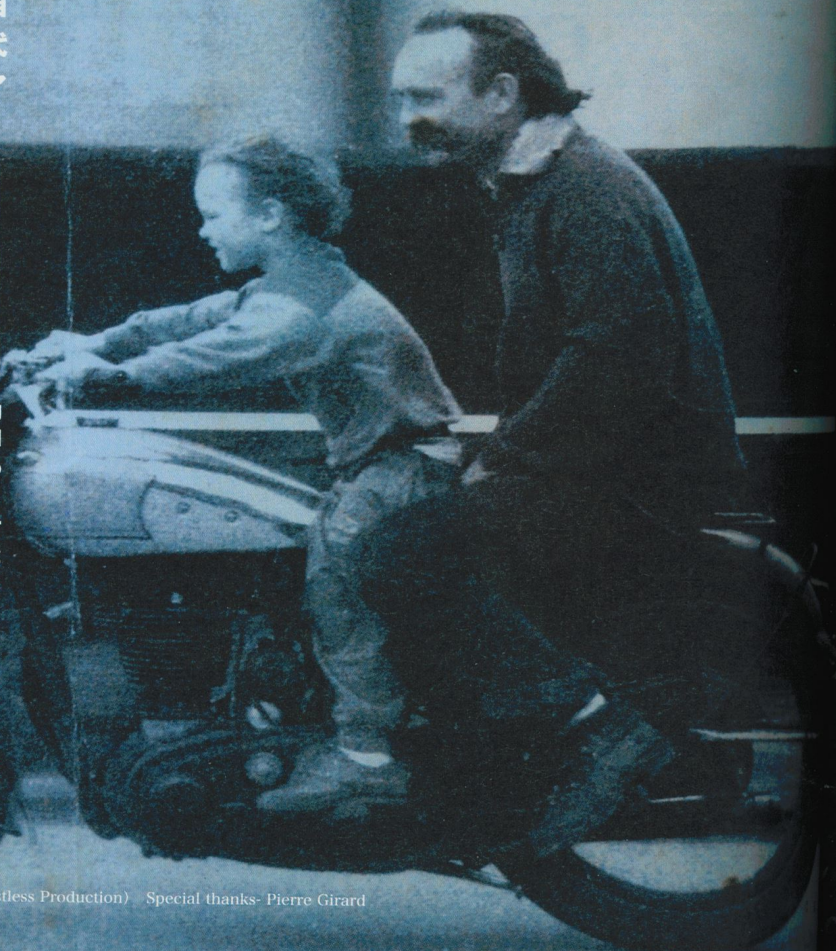
Thanks
40th
Anniversary
榎出版社

Atelier Chatokhine *in* FRANCE

壁にかけられた一枚の写真。父が操るバイクの後ろに愛息子が乗っている……のでは無く、当時7歳だった少年・フランクが1949年製のBSAを走らせている。父・ローランドの優しい眼差しは、何を想っていたのだろうか。フランスのシャルトルにその居を構える「アトリエ・シャトキン」は英国旧車を頑に扱うスペシャリストとして、フランス中より厚い信頼を寄せられている。父は既に息子に切り盛りを任せ、「モーニング・ライド」を毎日欠かさず楽しむ、悠々自適な日々を謳歌中だ。今回はシャトキンの2代目フランクと、親子でこよなく愛する2台のマシン、ペロセットにスポットを当てる。



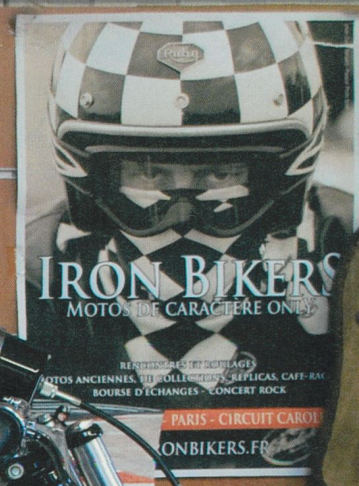
It's always a pleasure to see a father riding with his little one on the pillion. But better still when the little one is driving! When you step into Atelier Chatokhine in Chartres, France, customer confidence is revealed by the number of great British racing machines there to greet you - Matchless G50s, Manx Nortons, Velocette Thruxtons and more. The business was established in 1972 by Roland Chatokhine and now his son, Frank, has taken over the driving seat. Frank has been racing since his teens and his father encouraged him to ride top notch machines from the outset. We take a tour of the workshop, focussing on 2 Velocettes, dearly loved by them both



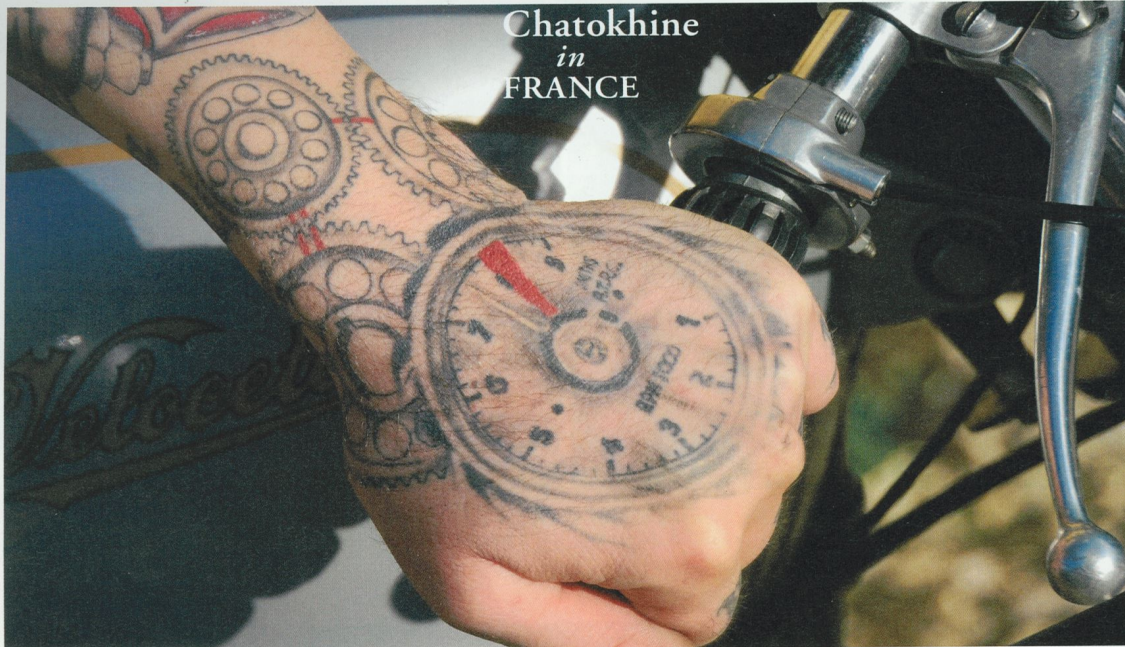
父と子が共に築き上げた
信頼が伝わってくる空間。

幼き頃から父のワークショップに入り浸っていたフランス人は、若く14歳にして「アトリエ・ジャイキン」の一員となった。彼がモーターサイクルにかける情熱は、数十年を経た今でも全く変わっていない。10代の頃より続けるロードレースでは、スーパーチャージャー付きのトライトンを与えられ、その後は父のベロセツト・スラクションでの出走を許された。そして、現在ではリジッドフレームにカトダールフォークを装備する戦前のトライアンフでもレースに参加している。また、彼はオフロード競技にも長け、トライアルを始め、ダートトラックなどもこなすオールラウンダーだ。ワークショップに飾られている数々のトロフィーはほんの一部であり、父のものも含めると膨大な数になると笑う。

シャトキンでは、戦前から70年代までの英車の整備やレストアを行っている。その中でも、プライベーターが購入出来たフリテイツシュ・レーシングマシンをの最高峰に位置づけ



Atelier
Chatokhine
in
FRANCE



スミス・メーターのレース用回転計を自身の体に刻む。その上部には
トライアンプのタイミングギアや、レース用のTTキャブレターも

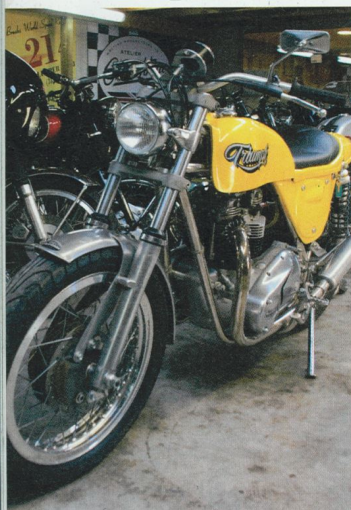


アトリエ・ルビーとも親交があり、これはスタッフが最近
入手したオリジナルペイントが残るトライアンプT100

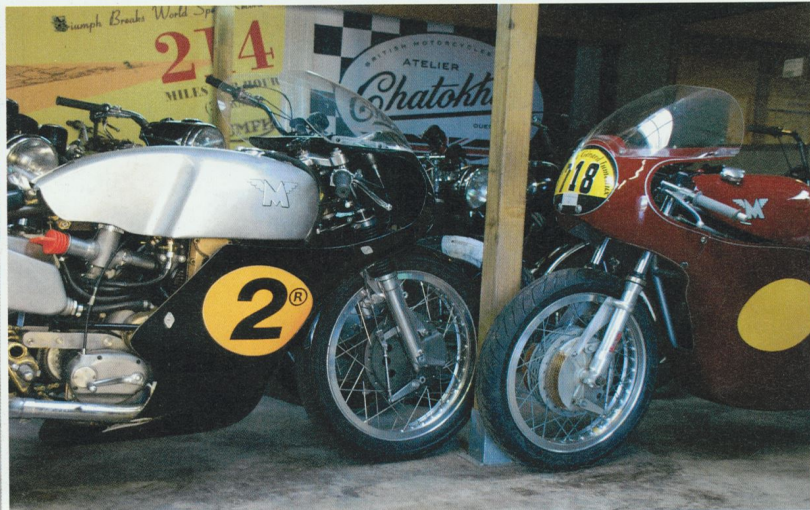


常連達がボンネビルのSpeed Weekに参加した際にメカニ
ックとして同行。シャトキンが仕上げた3台のマシンで挑戦

1



2



3



1: イギリスのWASPにて、独自のフレームが製作されたトライアンプ。2: 右はSeeley Mk2フ
レームにG50のエンジンを搭載。左は2年前にフランクが組み上げたレプリカG50。店内には当
時の個体も居並ぶ。3: シーリーコンドルと呼ばれる、G50エンジンを抱く公道仕様のマシンが
'70年代に存在した。その生みの親であるシーリー氏より正式に認可されたコンドル・レプリカ

られるノートン・マンクスト、4台のマチレスG50が一つ屋根の下に集う光景は中々見られるものではない。G50はOHCであるところからも整備性が格段に良く、メカニックに對しフレンドリーに設計されているとフランクは語る。パワーではマンクスの方が勝るものの、車体の軽さではG50に分があり結果的に速さへと繋がる、とも続けた。

また、父・ローランドはベロセットに心酔し、最速を誇ったモデル・スラクストンは最大で10台を同時所有していた時期もあったそうで、その情熱が伺い知れる。現在はここに登場する2台と、リビングルームに飾ってある1台の計3台を大切にしているそうだ。ちなみにスラクストンの名はイギリスのレースコースに由来。24時間耐久レースにおいて、平均時速100マイルを維持し続け、世界記録を樹立したベノム・クラブマンを更に研ぎ澄ました、公道仕様レースマシンがスラクストン。その背景と、生産数の少なさもあり希少なマシンの一台に数えられる。ベロス社のマシン製作のアプローチは、他のイギリスメーカーと違うこと。そして、レースマシンを想起させるエンジンアリングを感じるところに、二人は世代を超えて虜になっていると言う。シャトキンの名は、ブリテイツシュ・バイクシオンと共にこれ

からも歩み続けて行く。

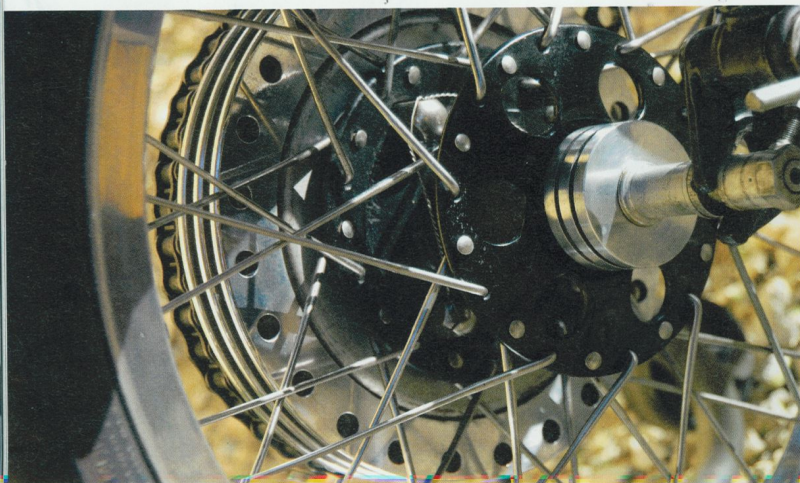


Atelier Chatokhine in FRANCE

1:親子2代で乗り繋ぐベロセット・スラクストン。ブラックのマシンはほぼオリジナルを保つ1965年製。もう一台はレースでの経験を惜しみなく注ぎ込まれたもの。2:ベロセットはベロス社が展開していたバイクに名付けられた総称で、社名ではない。3:極限まで削ぎ落とされたコックピット。レッドゾーンに近い回転数がレース中に目視しやすいように、Jaeger製メーターが90度回転している

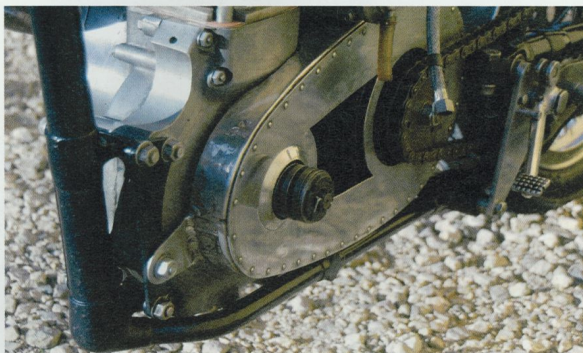
1
3 | 2



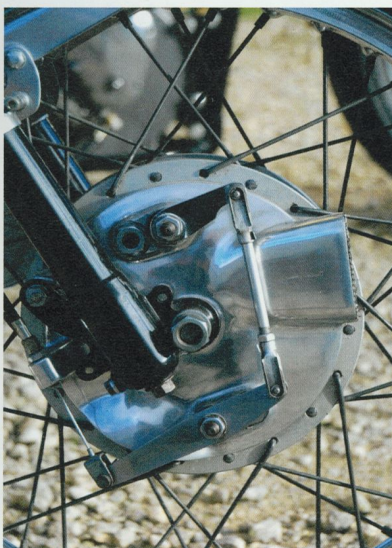


一世代前のリジッドモデルに主に使用されていた、均等にホールが配されたハブ。軽量化のために敢えて装備し、周りにはクーリング・フィンを追加加工

当時、ディーラーによっては独自のメタルプレートを車両に装着していた。この「Pride & Clarke」はロンドンの大型店で、バイクに関する全てが揃った



クラッチはベルトドライブに変更され、乾式化されている。2次駆動のドライブギアがプライマリーの外側に装着されているのもペロセットの特徴のひとつ



1: 「Remove Before Flight」リボンは航空機の安全管理に使用されるもの。レースシーンで、キャブレターの蓋に洒落で取り付けられることが多い。2: スラクストン用のブレーキは2種類。これは初期型のジョン・ティックル製。3: エイボンフェアリングと、跳ね上げて配される計器。その景色に惚れるエンスーリアストは多い。オイルタンクのヒートシールドも専用品